

つなぐ

「創立40周年記念事業シンボルマーク&メインテーマ」

渡辺 優氏が 平成11年度デザイン功労者表彰を受賞

去る10月14日、赤坂プリンスホテル・クリスタルパレスにおいて、当協会元理事長渡辺 優氏が長年にわたる当協会並びにデザイン界に対する功績でデザイン功労者表彰を通商産業大臣より受けられました。ご本人はもとより、当協会にとっても大変喜ばしいことであり皆様にご報告いたします。(事務局)

平成11年度デザイン功労者表彰を受賞して

関東事業支部会員 渡辺 優

今回このような表彰を受けることができたのは、40年近くの間JIDの会員として、微力ながらデザインの分野のお手伝いを続けてきたことによるものではないかと思えます。

ずっと自営を続けてきたとはいっても、実際には、デザイン事務所の経営に四苦八苦することもあり、つまらない仕事にも手を出さないわけに行かなかった時期がありますが、とにかくドロップアウトすることなく今日に至ったのは、多くの先輩や友人のお陰だと思っています。

デザインの仕事の上では、今でも自分の未熟さを感じることが少なくありませんが、いつの間にか歳の方は70になってしまいました。10年あまり通ってきた大学の方も、3月には退くことになり、2000年という年は、私にとって新しい転機ということになりそうです。

最近のデザインは、その役割や価値観がずいぶん多様化してきましたが、その一方で1950年代などのデザイ

JID NEWS

社団法人 日本インテリアデザイナー協会月報

1999 11・12

「目次」

● 渡辺氏デザイン功労者表彰を受賞	1
● JID賞選考経緯	2
● 平成11年度第3回理事会報告	3
● 日本の生活デザイン名古屋展	5
● 大阪「椅子'99」展に参加して	6
● 大阪「椅子'99」展を終えて	6
● 海外イベントへの参加報告	7
● WING 1999 SEOUL 参加報告レポート	7
● デンマーク人の心	9
● アクセサビリティ	10
● 国際委員会関西事業支部での活動	11
● 第19回IFI総会報告	12
● 3団体合同国際会議報告	13
● JID NEWS 関東	14
● JID NEWS 関西	16
● 中山博文さんを悼む	18
● 湯山武太郎さん・高須英彦さんを悼む	18



ンに、再び目が向けられることも多くなってきたようです。多様化して正体ははっきりしなくなってきたために、明快なデザイン思想を持っていた時代が「良き時代」として、若い人たちにも関心の対象になってきたのかもしれない。

このようなデザインの歩みを、自分の半世紀の体験と照らし合わせ、今は楽しい気分で「デザインとは何か」を改めて問い直しています。今回表彰していただいたことを、私としてはピリオドとは考えたくありません。自分なりの考え方をまとめ直すよい機会だと思っています。

1999年JID賞の選考経緯

選考委員会委員長 清水 忠男

JID賞は、昨年度から募集要項を大幅に刷新し、本年度はさらに、学生賞部門を新設した。応募は従来無料であったが、現地・現物審査を充実するために、応募1点につき2千円の応募料を徴収したこと、また、公募期間が短かったことなどから、応募点数が激減するのではないかと懸念されたが、蓋を開けてみれば、昨年には及ばなかったものの、例年を上回る74点の自薦応募があった。その内訳は、インテリアスペース部門が55点、インテリアプロダクト部門が10点、インテリア研究・著作・業績部門が2点、学生賞部門が7点である。

第1次審査は1999年9月より2回にわたって行い、第1回目は、応募資料による審査であった。これは、現物が提出されたインテリア研究・著作・業績部門を除き、各作品ごとに提出されたA4判のファイル（図面、写真、説明文等をまとめたもの）を基に行われ、非常に時間のかかるプロセスであったが、詳細な検討を行うことができた。こうして各部門の作品について粗選びを行った後、選考委員が手分けしてこれらの作品を現地や現物にて確認し、第2回目に、より詳細なディスカッションと投票を行い、インテリアスペース部門7点、インテリアプロダクト部門3点、インテリア研究・著作・業績部門1点、学生賞部門3点に絞って第1次審査通過作品とした。

第2次審査は、10月前半から中旬の間、インテリアスペース部門賞の候補となった全作品および一部のインテリアプロダクト部門について、それぞれ複数の選考委員による現地・現物審査を行った後、最終審査会を開き、長時間にわたるディスカッションと投票の後、インテリアスペース部門では部門賞3点、奨励賞2点、インテリア研究・著作・業績部門では部門賞1点、学生賞部門では部門賞2点の各賞を決定した。インテリアプロダクト部門では、最終審査に残った3点がいずれも入賞に至らなかった。また、全部門を通しての最優秀作品に与えられる大賞についても、残念ながら該当作品がないという

判断であった。なお、これら8点の受賞中、日本インテリアデザイナー協会正会員による受賞は1点、賛助会員所属者による受賞は1点である。

1999年JID賞入選作品リスト

●大賞：該当作品なし

●インテリアスペース部門

部門賞：大林組東京本社

d；神藤正男（株：大林組東京本社設計本部設計部）

部門賞：沖縄くすぬち平和文化館

d；西島正樹（株：プライム一級建築士事務所）

部門賞：JR西日本〈新ゆふいんの森〉号

d；水戸岡鋭治（ドーンデザイン研究所）

奨励賞：舞妓ミュージアム&カフェ

d；中村勇大（中村勇大アトリエ）

奨励賞：家庭酒菜処〈OHANA〉

d；田頭健司（田頭健司建築研究所）

●インテリアプロダクト部門

部門賞：該当作品なし

●研究・著作・業績部門

部門賞：「NUNO NUNO BOOKS」

d；須藤玲子（株：布）

●学生賞部門

部門賞：「CTループ」

d；池田雪絵、井上朝堆、今村彰宏、
栗原由典、鎗木丈晴
（東京大学大学院工学系建築学）

部門賞：「Fplding Chair」

d；早船裕介（武蔵野美術大学工芸工業デザイン）

〈1999年JID賞の全体講評〉

今回は、初めての応募料の徴収、公募期間の短さなどの条件が重なったせいか、応募件数は昨年には及ばなかったものの、例年をかなり上回った。相変わらずインテリアスペース部門への応募数が多く、全体的にレベルも高かったが、昨年度の大賞となった「吉備高原小学校」のように、審査委員全員をうならせるというような傑出した作品は見当たらず、福祉やエコロジーに焦点を当てた意欲的な作品や地域振興に貢献した作品もほとんど見られなかった。また、インテリアプロダクト部門では入賞作品すら生み出しえなかった。昨年に比べて、やや力不足であったことは否めない。これは、この業界全体が直面している厳しい経済的状況め影響でもあろう。実施作品を対象としたデザイン賞の公募もまた、そのような状況から逃れられなかったと言える。しかし、歴史を振り返れば、たくましい創造的運動の多くは不況下の産物だったのである。幸い、新設された学生賞部門には、若々しく意欲的でレベルの高い作品が数多く寄せられ

た。次年度のJID賞が新しい世紀の門出にふさわしい内容になることを期待しよう。

〈各賞の講評〉

●インテリアスペース部門について

部門賞となった3作品はそれぞれ特色があり、いずれも甲乙付けがたい。

「大林組東京本社」は、大手ゼネコンの本社ビルのインテリアスペースである。デザインの基本計画の段階から芸術家との協同を積極的に行い、働く環境の中で日常的に優れたアートを楽しむ質の高いオフィス空間の創出に成功している。この空間は予約制ではあるが一般にも公開されており、その開放的な企業姿勢も評価された。

「沖縄くすぬち平和文化館」は、平和を祈念し、沖縄の歴史と文化に関する資料を集めて公開するとともに、多目的ホールやラウンジ、子ども向けの書店などを組み込んだ半公共的施設である。地元の夫妻が米軍基地に接収された土地の補償金を基にした私財を投じて完成させた。内部は外観の小規模さから想像できない変化に富んだ空間となっており、入口周辺の石積みには沖縄の伝統も反映されていて好ましい。

JR西日本〈新ゆふいの森〉号は、緑深い山並みを走る急行列車の総合的デザイン。眺望を楽しむハイデッカータイプで従来難点となっていた車両間の連続・乗降部分に新しい解決を盛り込み、車内と車外の風景が連続するような緑色と木材の素材色の組み合わせもさわやかで、ユニバーサルデザイン上の配慮も随所にさりげなく施されている。鉄道車両のインテリアデザインの今後のさらなる可能性を示唆する好例と言えよう。

奨励賞となった2作品は、完成度においてやや問題があるものの、低予算を逆手にとったり、空間構成に優れた感性をのぞかせたりしていて、いずれも興味深いデザインとなっている。

「舞妓ミュージアム&カフェ」は、京都の古い街並みにある小さな茶屋を改造して、舞妓に関連した資料を展示しつつ飲食を楽しむようにしたもの。剥き出しにされた古い壁の前面に半透明の新素材をめぐらし、白い床に軽やかな展示台が浮かんでいる。伝統を現代感覚で解釈し直したおもしろさが評価された。

「家庭酒菜処〈OHANA〉」は、その名の通り、酒と肴を楽しむ店である。木をふんだんに使ったこの手の店は珍しくはないが、実に心地よく落ちついていられる空間となっており、構成にはデザイナーの優れた感性がうかがえる。

●インテリア研究・著作・業練部門について

部門賞となった「NUNO NUNO BOOKS」は、インテリアテキスタイル専門店のいわば広報誌であるが、目指すテキスタイルの質の高さを視覚的にはっきりと伝えようとする一貫した姿勢が評価された。編集・グラフィッ

クデザインとも優れており、見ていて飽きさせない。

●学生賞部門について

部門賞2点の一方、「CTループ」は、階段ホールに水平の2層の板状のループを設置してレーザー光線を仕込み、階段というレベル差を移行する人間を輪切りにすることによって、関係性の生み出す新しい家具の機能を提案したもの。コンセプトの斬新さが高く評価された。

部門賞の残る1点、「Folding Chair」は、そのタイトルの通り、折り畳み椅子のデザインである。真面目な追究ふりと現物作りや図面などに示された優れた表現力が評価されたが、形態的な面でユニークさにやや欠ける点が惜しまれる。

〈1999年JID賞選考委員会〉

委員長	清水忠男	千葉大学教授
委員	泉 修二	JID理事長
	今崎 務	今崎 務デザイン研究所代表
	大野美代子	エムアンドエムデザイン事務所代表
	川上信二	フォルムエスケイアール 代表
	島崎 信	武蔵野美術大学教授
	白石勝彦	白石勝彦住空間計画室代表
	長岡貞夫	長岡貞夫デザイン事務所代表
	森谷延周	Mデザインスタジオ代表
	渡辺 優	千葉工業大学教授

平成11年度第3回理事会報告

①会議名：平成11年度第3回理事会

②日 時：平成11年9月22日（水）13：30～16：00

③場 所：JID本部事務局 会議室

東京都新宿区西新宿3-7-1 新宿パークタワー 8F

④出席者：理事総数15名中（本人出席14名）

（理事長） 泉 修二

（副理事長） 中川帛子、夏原晃子

（理 事） 今崎 務、岩倉榮利、木村戦太郎、
吉良ヒロノブ、小宮容一、
阪井良種、関 里繪子、中川千年、
中川千早、山口道夫、山本棟子

（委 任） 浅野盛治

（監 事） 栢原秀榮（欠席）、川上信二

（事務局長代理） 峰尾 武

⑤議 事

峰尾事務局長代理より「理事総数15名中、本人出席14名、委任状出席1名で本理事会は成立した。」旨報告。理事長が議長となり議題に入った。

Ⅰ 報告事項

(1) 各事業支部及び本部各委員会事業推進状況

◆関東事業支部（阪井）

「日本の生活デザイン展」会場協力、若手会員制度

「JID関東ユース」の検討、「第9回デザイン職人四方山話、渡辺 力氏」の実施予定及び「建築技術試験所」見学等を予定と報告。

◆中部事業支部（関）

「日本の生活デザイン展」名古屋の実施に向け、協賛会社（30社）等も集まり準備が整う。又オープニングパーティ前にフォーラムの実施を決定。その他「インテリアルネッサンス'99」10月開催の打合せ実施を報告。

◆関西事業支部（夏原）

「椅子'99展」の椅子が揃い準備が整った。又オープニングパーティとセミナーの実施が決定。その他国際委員会、交流委員会によるIFI会長夫妻を囲んでの懇親会と、夫君による講演会を開催したと報告。

◆九州事業支部（中川千年）

九州デザインリーグ実行委員会に会員の出席、及び今後の予定として「デザイナーからの提案」の作品展に参加、又「デザインに親しむ」で小学校での授業を会員が行うと報告。

◆総務委員会（山口）

定款改訂委員会の呼び掛けにより、各種規定及び細則の検討会に参加、一部先行した選挙規定と会員規定との整合性などについて検討の予定。又来年の新春交礼会について関東事業支部、JID賞関係と調整の予定と報告。

◆組織委員会（浅野理事委任出席のため文章による）

会員のメリットを前進させるため資料を取り揃えた。会費の値下げと40周年記念事業の結果を結び付けた、新会員募集のパンフレットの作成を企画と報告。

◆定款改訂委員会（今崎）

定款改訂委員会は「平成11年・定款改訂」に関する任務は一定の成果を納め完了したと考えられ、諸規定の改訂については「規定改訂委員会」（仮称）等を新たに理事長の指示により設置、取り組んでほしい旨要望。

◆国際委員会（中川帛子）

第19回IFI総会（シドニー市）に中川副理事長の出席を予定。今後若い人達の参加を希望、多くの人たちの継続した出席で発言権を得るよう努力していきたいと報告。

◆交流委員会（岩倉）

「日本の生活デザイン展」の受付。第5回デザイン供養の企画と案内（傘のデザインを含む）を行うと共に、他団体（ディスプレイデザイン協会、商施連、鳥取、島根デザイナー協会に呼び掛け参加を求めた。

◆広報委員会（吉良）

出版委員会と合同会議を開催、賛助会員向けのインターネット広告を募集、会員向ホームページ製作講習会（関東）の実施、又（関西）を予定、その他JIDホームページ（TOPICS）コーナーへ「第9回デザイン職

人四方山話」、JID国際活動のページに「IFI関連団体」ページへのリンク集、以上をアップロードと報告。

◆出版委員会（山本）

中部・関西事業支部と出版物の位置づけや新機関誌に関する意見交換を行った。「インテリアデザイン FROM JID」117号発刊（今秋予定）の具体的な編集の確認。福祉社会とインテリアデザインという内容で、JID会員がどのように社会福祉とかかわっているのか、現状の確認と今後の展望把握のためアンケートを実施、紙面に反映させると報告。

◆事業委員会（木村）

「JID・リビングデザイン・シリーズ展企画委員会」を特別委員会にすべきと思われるので検討していただきたい。受託事業は「'99国際家具見本市」の特別イベントコーナーの企画を受託、「オーガニックライフ・有機的健康空間」と「ホームオフィス家具・体験コーナー」の2つを提案と報告。

◆教育・研究委員会

デザイナーである我々を取り巻く社会を一冊の本を契機として、問題を提起し、会員を中心にフォーラムを行う。その他の会員のためのサービスとしてカラープリンターを事務局に導入し、会員に安く利用できるようにしてほしいと要望。

◆デザイン保護委員会（小宮）

文化庁より著作権法改正検討事項に関する意見照会があり、デザイン保護委員会全員に意見を求め、協会としてデザイン著作権について認知されるような法の改訂の検討を要望した。

◆40周年記念事業実行委員会（泉、岩倉）

40周年記念事業「日本の生活デザイン展」は入場者数16,215人、オープニングパーティ422人の出席者があり、盛況の内に終了した。新聞社23社、雑誌38社が掲載し、テレビ5社による放映があった。又今後横浜でシンポジウムを行い、後で40周年記念事業の報告をまとめる。

◆活路開拓事業委員会（中川千早）

「エコインテリア素材・製品の活用、普及のため基準と手法に関する連続シンポジウムを、大阪、福井、東京で開催を決定と報告。

◆選考委員会（文章にて）

JID賞は7月上旬より募集、8月30日をもって締め切り、70余点の応募があり、今後応募要項に記載されたプロセスを経て、10月中旬には審査を終了する予定、又入賞作品はOZONEリビングデザインギャラリーで展示の予定と報告。

(2) 平成11年度収支状況報告（8月末日現在）

平成11年度収支（8月末）報告及び40周年記念事業収支（8月末）報告について事務局長代理より報告。

(3) 日本デザイン団体協議会事務局長会議報告

平成11年度第1回事務局長会議を実施、定款改訂に

伴う諸規定の改訂等について各団体より報告があり、概ね完了しているとのこと。デザイン保護関係については継続していくこと。又今後8団体の規約については現状に合ったものに改訂していくため討議することなどを事務局長代理より報告。

(4) 本部役員選挙及び選考委員選挙等の実施スケジュールについて事務局長代理より説明。

(5) 仮名簿の発行

本年度名簿発行が見送られたため、仮名簿の発行を行う。会員には10月5日発送予定と事務局長代理より報告。

(6) その他

- ・ 訃報：山田伊三郎（関東）会員 平成11年7月31日没享年58歳
- ・ JIDニュース、10月25日発行予定。（山口）
- ・ 次回理事会予定（第4回）平成11年11月17日（水）

議長は報告事項について了承を求め、理事会はこれを了承した。

II 議案

第1号議案 人事承認の件

- ・ IFI総会派遣人事の件
中川副理事長を派遣
 - ・ 役員選挙に伴う選挙管理委員長選任の件
内田正雄氏を選任
 - ・ 選考委員選挙に伴う選挙管理委員長選任の件
内田正雄氏を選任
- 議長は承認を諮り、全員異議なく承認した。

第2号議案

- ・ 役員選挙規定（案）承認の件
 - ・ 会員規定（案）承認の件
- 今崎担当理事より、上記2件に関しては、総務委員会、組織委員会、定款改訂委員会に対して理事長より要請し、新たな人事組織で審議してほしい旨発言があり、議長は承認を諮り、全員異議なく承認した。

第3号議案 賛助会員の会費の値下げに関する件

審議の結果、議長は承認を諮り、現在は其の状況にないとし、取り上げないこととした。

第4号議案 協賛後援名義承認の件

事務局長代理が下記7件について説明した。議長は承認を諮り、いずれも異議なく承認された。

◎第1回「ユニバーサルデザイン展」

1999年8月19日（木）～10月5日（火）

主催（株）リビング・デザインセンター

◎第5回「木造建築物に関する研究会」

1999年10月14日（木）

主催（財）日本住宅・木材技術センター

◎セミナー「感性科学と生活」

平成11年11月11日（木）～12日（金）

主催 日本生理人類学会

◎大川総合インテリア展「華胥の夢博'99」

1999年10月1日（金）～3日（日）

主催（財）大川総合インテリア産業振興センター

◎第2回「暮らしの中の木の椅子展」

1999年11月～2000年5月27日（日）

主催 朝日新聞社

◎第19回インテリアファブリックスショー「JAPANTEX 2000」

2000年1月26日（水）～29日（土）

主催（社）日本インテリアファブリックス協会

◎第15回国民文化祭・ひろしま「産業デザインフェスティバル」

平成11年11月1日（月）～平成12年11月12日（日）

主催 第15回国民文化祭広島実行委員会

第5号議案 会員入退会承認の件

事務局長代理が下記7件について説明した。議長は承認を諮り、いずれも異議なく承認された

正会員・入会（4件）

檀本 淳子（九州）推薦人：北村新比古・木村 洋子

広瀬 育代（関東）推薦人：白石 勝彦・林 柳江

外山 雄一（関東）推薦人：高橋 三太郎・中村 昇

藤田 哲也（関東）推薦人：下津浦和子・高橋三太郎

正会員・退会（1件）

松縄 健

賛助会員・入会（1件）

（株）熊谷組 設計本部（関東）紹介者：峰尾 武

賛助会員・退会（1件）

アイカ工業（株）

第6号議案 議事録署名人選任の件

議長は関 里繪子、中川千年両理事の承認を諮り、異議なく承認された。

「日本の生活デザイン名古屋展」

10月15日（金）～10月24日（日）

国際デザインセンター

JID40周年記念事業の中心的な企画のひとつ「日本の生活デザイン名古屋展」は、10月15日から24日の10日間、名古屋市の国際デザインセンター・デザインホールで開催され、好評のうちに終了いたしました。来場者数は5147人と大勢の方々を迎えることができ、デザイン関係者のほか大学・専門学校学生、高校生、主婦、企業に勤める一般の方々などに観覧していただきました。

来場者の滞留時間が長いのが「日本の生活デザイン展」の特徴のひとつとなっているのは、内容が濃く、それらを熱心にじっくりと観ていただけたということだと思います。会場で行ったアンケートが10%を超える高い解答率だったことから、来場者の興味・関心の高さがうかがえます。「日本の生活デザインの流れがよく理解できた」、「分かりやすかった」、「どのデザインにもあたたかみを感じた」、「3回見た」、「またやってほしい」など、

好評のコメントも多く頂戴いたしました。

また、当展覧会は、地元のテレビ、ラジオ、新聞などで報道され、注目、話題を集めるとともに、高く評価していただきました。

「日本の生活デザイン名古屋展」開催にあたっては、主催構成団体である名古屋市、国際デザインセンター、中部デザイン団体協議会そしてJID中部事業支部の皆様には大変お世話になりました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。また、今回の展覧会の成功は、全JID会員の協力あつてのことだったと思います。皆様に感謝いたします。



創立40周年記念事業実行委員会
日本の生活デザイン展委員会担当理事 岩倉 榮利

大阪「椅子'99」展に参加して

関東事業支部組織委員 與良 博孝

昨年の東京ビッグサイト行われました40周年記念展、100人100脚、100mに引続き、去る10月9日から13日まで、大阪アジアトレードセンターATCホールにおいて、「椅子'99」展が開催され、2万人の見学者がおとづれる中、大好評のうちに終えることができた聞いております。この企画を実行されました各委員、関西支部の皆様、大変おつかれ様でした。

私が会場を訪れたのは、初日の土曜日ということもあってか、学生さんの熱心にメモをとりながら見学している姿が印象的で、数人の方々と直接意見交換ができたことも大変有意義なことでした。ただ、オープニングセミナー&パーティーに出席出来なかったことが唯一残念でした。

さて、この2回の椅子展の特徴といえば、プロダクトデザイナーのみならず、各分野の方々が、独自のテーマでさまざまな思いで椅子に取り組んでいることだと思います。

2000年という新しい時代に要求される椅子の「かたち」、「機能」そして新たな付加価値を予感させられるヒントが数多く見うけられ、次回がますます楽しみになってまいりました。

生活者と「つなぐ」メーカーと「つなぐ」ビジネスチャンスに「つなぐ」、単なる展示会に止まらず、更に注目度の高いイベントを目指し、40周年事業終了後も是非続けてほしいと思います。

椅子大好き人間、1年1脚を目標に、がんばりましょう。



「椅子'99」展を終えて

関西事業支部 展覧会副委員長 鬼田 勲

創立40周年記念事業として、東京の「椅子」100人100脚100m展を受けて、大阪のATC（アジアトレードセンター）展示ホールにて「椅子'99」展を開催しました。（財）国際デザイン交流協会主催の第9回国際デザイン・フェスティバル「国際デザイン展'99」の中にJID展示ブース（展示面積330㎡）として100脚の椅子が並びました。10月9日～13日までの5日間の会期中には、国際デザインコンペの授賞式、デザイン・アワードの授賞式や諸々の国際的なデザイン会議やシンポジウム等のイベントが行われる中、JIDの展示ブースにも多くの来場者を迎えました。とくにJIDの展示ブースは会場のメイン・エントランスに位置し、2万人以上の来場者で賑わいました。

デッカイイス、かわいいイス、カラフルな椅子、技を見せる椅子、車椅子など、幅広くデザイナーの思い思いのアイディアが盛り込まれた椅子の群は、一般来場者には大変興味のあるイベントであったようです。ある集団の中から喚声があがったり、笑い声が聞こえたり、順番に座って意見を交わしあう人々など、かなり活気ある会場風景が見られました。

一般に専門家集団の主催する専門家のための展示会となることが多い中で、大きな椅子に身を沈めながら「こ



「えーわっ！」と目を閉じているお年寄りを見ていると、今回の「椅子'99」展が今までとは何か違う。一般の生活者と対話をしている展示会であるように思えました。西欧に比較して日本人のインテリアデザインに関する意識度が云々されることもありますが、今回の展示会を通じては人々の椅子に対する関心の深さを感じさせられた椅子展でした。

今後このような外へ向けてのイベントを続けて行くことがJIDとして重要であることを再認識しました。

展示会に協力、参加頂きましたみなさんには大変ご苦労をお掛けしましたが、展示会から得たモノも多く、成功裡に終わりましたことをご報告致します。

【 海外イベントへの参加報告 】

今年の6月、韓国インテリアデザイナー協会がIFIとの共催で、学生と若いデザイナーの為の国際デザインワークショップ“WING1999 SEOUL”を企画、JID会員の参加を求められました。あいにく、開催期間が夏休み直前で、JID NEWS等で募集しましたが会員、学生共参加がかなわず、会員関係者の中から4名の若いデザイナーが参加されました。8カ国、101名の参加があったとの報告がありました。参加者の一人、須長檀さんにワークショップWINGの報告をお願いいたしました。なお、須長檀さんは関東支部会員、須長壮太郎さんのご子息です。

IFI/.KOSID主催国際ワークショップ WING 1999 SEOUL 参加報告レポート

須長 檀 (SUNAGA DESIGN OFFICE)

1999/6.29～7.9まで韓国の建国大学（ソウル市外の総合大学）に於て韓国、ポーランド、アメリカ、フラン

ス、南アフリカ、マレーシア、デンマーク、日本から総生徒数101名参加したワークショップが開催され、日本から4名の参加の一人として参加しました。参加者の専門分野は建築、ランドスケープ、プロダクト、インテリア、家具に及び、建築出身の人が一番多く参加していました。講師はKim Thornton-Smith(豪) Olle Anderson (sweden) Ingrid Templer (南ア), Andre Pietsch(独) Pavel Zverina(チェコ), Shirlee Singer (USA)の諸先生と、韓国の若手教授6名が指導に当たられました。

＊ワークショップの目的：21世紀をにう若いデザイナーたちの育成と国際交流。テーマ：地球／土(earth)。

＊6/29 建国大学に集合。WINGオリジナルのTシャツ、スケジュールのファイル、NAMEプレートをもらう。ワークショップは大勢のボランティアに支えられ、英語の不得手な参加者にはゆっくり丁寧に英語で説明し、気軽に声をかけるなど温かい配慮が感じられた。宿泊先は建国大学の寮が宛てられ、他の階には建国大学の学生も暮らしていてそこでも新しい交流が生まれた。レクチャーと日常生活を含めコミュニケーションはすべて韓国語と英語だけで行われ、特に連日行われたレクチャーは英語のままならない私にとって辛い時間となった。

参加者101人は6つのクラスに分けられ、韓国の先生1人と海外からの講師1人に韓国の学生が13人、外国人生徒が3人程のバランスのとれたクラスに編成され、ワークショップが始まった。自己紹介、自国の紹介、ワークショップのオリエンテーション後、各6つのクラスの先生の個性、分野に依り異なった課題が与えられ、ワークショップのスタートだ。連日の講演と演題は

6/28：基調講演Kim Oak“SOIL HEALTH DESIGN”

Ingrid Temple“Back to Basics”

Jean Wilmott“Interior and Exterior”

6/29 Olle Anderson“Poverty as an Art”

Kim Thornton-Smith“The Australian

Aboriginal in the Modern World”

6/30 WS2日目：わたしのクラスはスウェーデンのアンダーソン氏。各自が板状のclayをデザインし1枚1枚を組み合わせせて箱を作りその中に20世紀に生きて

いる私達にとって、生活する上でもっとも重要なものをスケッチして21世紀の人々へ送るメッセージとして箱の中に納める。その箱を建国大学の敷地内に埋めた。スウェーデン人のアンダーソンらしいワークショップだ。

7/1 韓国の伝統的な建築を各地から集めたフォークヴィレッジを半日見学。韓国には独特文化がなく、中国や日本から大きな影響を受けているものが多いとの事。日本の民家に似た形態が多かったように思えた。宮殿など大きな建築には、中国による影響を見る。その裏には侵略や植民地など悲しい歴史があり、事実を避けることなくしっかりと理解しうけとめ、これからの韓国と日本の新しい関係を作りたいと感じた。韓国の友人たちも、反日感情を表すことなく1人の友人として接してくれた。

メイン課題のワークショップでは各クラスごとに異なったテーマを与えられ、一人又は2～3人のグループで一つの作品を製作する。私のグループの課題は3m×3mの敷地に単身者向けの住宅設計。最終的に1/5を提出する。

7/2 午前中はワークショップの続き。思い思いに模型をつくる。午後からHome stay。私は建国大学の理事のお宅へ泊まらせて頂く。代表的な韓国料理であるプルコギを御馳走になり、夜は先生と生徒を交えキャンプファイヤーをして、楽しい時間を過ごす。

7/4～6 大学にもどり韓国の代表的な音楽と踊りで迎えられゲームやパフォーマンスで連日の課題から解放されリラックスする。土曜日、日曜日、Home stayとパフォーマンスで楽しみ、リフレッシュした後は最後のおい込み。この日から2日間は徹夜で課題の総仕上げ。

7/6、朝まで作業。9:00、プレゼンテーション。クラス単位で発表。担当の先生の他に韓国のデザイナーの方2名が加わり、講評を受ける。その後作品をソウル市内のエキジビションホールに移動。夜はリゾートホテル貸しきりのParty。先生も生徒も課題が終わり、緊張がとれ思う存分踊りを楽しむ。

7/7 エキジビションのオープニングパーティー。パス

タ&カフェで食事。その後、外国からの生徒達はスライドと音楽を織りまぜながら自国の特色を発表した。しかし私はこのような発表があることを前もって知られていなかったのも何とも用意しなかった。とても残念な結果になってしまったが、少し連絡事項を確認しておけばと今でも悔やまれる。

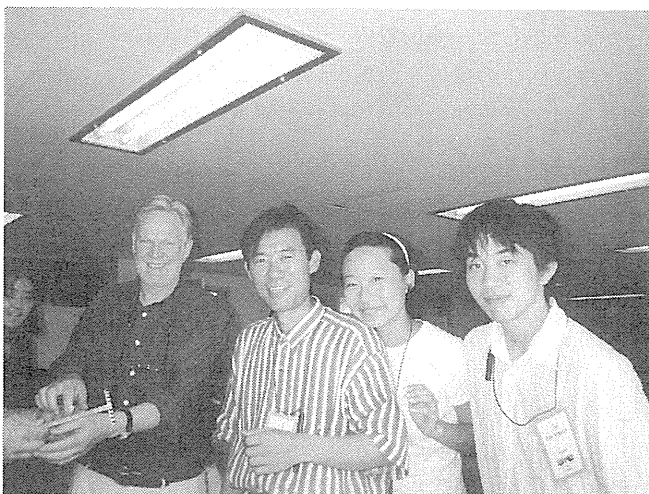
7/8 最終日:P. Zverina氏の講演”Case studies on Symbiotic Interior Design”終了証書受理、Good studentの発表があり、日本人4人うち私を含め2人がGood studentに選ばれた。夜、Night party:それぞれの国の伝統衣装に着替えパーティーが開かれ、私達も浴衣に着替え参加。

7/9 帰国

今回の体験は私にとって本当に楽しく勉強になった2週間でした。レクチャーやワークショップはもちろんのこと、多くの出会い、体験、発見がありました。なにより韓国は日本に一番近い国でありながら、私は何も知らなかったのだと感じました。最もおどろいたのは、韓国の方の「親切さ」です。儒教の教えのせいなのでしょうが、年上の人や年下の人を自分の兄弟のように面倒をみますし、年下の人や年上の人を尊敬して、頼りにするという関係があります。私も出会ったばかりなのに、いろいろな方に助けて頂きました。また、たくさんの友人を作ることができました。その友人たちとはWINGが終わった今でももちろん続いていますし、これからも大切にしていきたいと思います。英語が上手く通じなくて悔しい思いをしたり、辞書をひきながらでも考えが通じて嬉しかったことすべてが私にとって財産です。次回もチャンスがあればぜひ参加したいとかがえています。またもっと多くの若いデザイナーや学生の皆さんにもこうした国際的な体験をする会に積極的に参加してもらいたいと思います。きっと素晴らしい経験をすることになるでしょう。最後になりますが、私を支え、導いてくださっ方たちに心から感謝します。素晴らしい体験をさせて頂き本当にありがとうございました。



アンダーソン氏から指導を受ける



アンダイソン教授と 右端、須長さん

去る7月19日JIDとSADI(北欧建築デザイン協会)との共催でデンマークのインテリアデザイナーでIFIの理事長のマリアンヌさんと夫の建築家のハンスさんの講演会が行われました。SADIの名誉会長・樋口先生に講演会の印象について書いていただきました。また紙面の都合でハンス・ホーイェンセンさんの講演内容は次回に報告します。

デンマーク人の心

樋口 清

福祉 デザインの専門の問題でも、デンマークの人が話すとき、人間的な広がりや暖かさ持つものとなる。この夜の話もそうであった。

まずマリアンヌ・フランドセンさんの話。二つの並べたスクリーンの端から端まで一本の水平線、海拔200mを超えないデンマークの海上からの遠望。代わって二つの画面いっぱい日差しの洩れる緑の森の中。酪農とデザインの国の自然の心憎い紹介であった。

お仕事の紹介は、アフリカでの活動のひとつまで、校舎の間の庭に子供たちが大勢地面にじかに絵を描いている写真。読み書きや算数から解放されて、自由に作り、表現しているとの説明。その喜びが2つのスクリーンに溢れていた。

本題はアクセサビリティー。診療所もマーケットの中に移った今日、そこに行くための入口で内と外の床の色が違うので、老女が、段差があるかと一瞬迷う間に自動扉が閉まり、転んで大怪我。そのことから、建物の設計は経済性だけでなく人間の心理を考えに入れるべきであり、デザインの良さは美しさより安全な形を選ぶことにあるとして、アクセサビリティーの提案となった。バリアフリーはわが国でも当たり前となったが、これはそれをさらに進めた積極的な考えで、アールトの言った「人



間中心のデザイン」の具体例である。

最後のスライドは、やはり緑の葉を透す陽光の美しい木陰で、お茶の時間に二人の老女が語り合う2つの場面。福祉社会の安らかな老後の生活を思わせ、見ている方も気持ちが明るくなった。

続いてハンス・ホーイェンセンさんの話。空港は一般にスーパーマーケット化しているが、そうしないで、見知らぬ土地の風物や人に会うことを期待して来る旅行者を快く迎え送りだす場所にしたいという考えから始まったとのこと。これはまさにアクセサビリティーのデザインではないか、と微笑まされた。

そこでプランは明快。どこも見通しがよく、構造も単純だが木のせいかわかみがあった。詳細な部分の写真が多かったので、構造技術に関心がある人には面白かったであろう

講演が終わった後の質問で、日本ではこのような建築物は法規によって木が使えないのでその点を尋ねる人がいた。それに対して、ノルウェイも事情が同じであるが、木が固くて燃え難いなどの理由をあげて「ピンポン玉をやりとり」するように何回も話し合いをして理解して貰ったという答えであった。その粘り強さに感心したが、話し合いに応ずる社会も羨ましかった。私たちの課題であろう。

また日本の建築はどう思うかとの質問に、技術の程度は高いが。いろいろ形の影響が見られる、ポストモダン嫌いだと言われ、むしろ伏見稲荷の鳥居の列に興味をもたれたようであった。日本の建築の印象がそれでは寂しすぎるので、ひばりが丘の自由学園(遠藤 新・楽設計)を見に行かれるようにお勧めしたが、思ったとおり、喜んで頂けたらしい。

JIDとSADIの共催は初めてであるが、このような話を多くの人に聞いて貰うために、時々あっていいと思う。

通訳をされた中川さんはフランドセンさんと国際会議で知り合いになられたとことであるが、今回の計画をして頂き、お礼を申し上げます。



アクセサビリティ

マリアンヌ・フランドセン (President IFI)
Marianne Frandsen
(Board Member of Design for the World)

世界中で人間の平均寿命がのびているという事実はわたしたちにさまざまな課題をつきつけている。高齢化がもたらす機能的な問題はすでにあきらかにされてきているが、それに関連する諸問題を解決する多分野からのアプローチの大切さはまだよく認識されていないようだ。

ここにひとり、85歳の老女がショッピングモールの自動回転扉の前で立ちすくんでいる。老女が立ちまったのは、ちょうど扉の所で床の色がアスファルトの灰色からタイルの明るい色に変わっているからである。通常、このように床の色が変わることは階段など床に段差があることを意味する。

彼女の視力も、歩く能力も85歳の老女としては歳相応であったが、扉を前にしての一瞬のためらいがもとで、老女は扉に当たり、よろめいて転び、腕と、尻を骨折した。入院、手術、リハビリということになり、運動能力は低下してしまった。精神的にもショックを受けたのは言うまでもない。

その回転扉は恐らく幾分かは使う人たちのために自動にしてあったのだろうが、冷暖房の省エネルギー（つまり経費節減）という設備上の理由から自動としたのである。

この扉の場合は、通る人に合わせてゆっくり開閉するようにし、床の色違いによる間違いをなくすように色の修正をすること等々、改善が当然必要である。将来起こり得る類似の事故は避けるようにしなければならない。

だが、現実にはその通りにはならない。この回転扉のことは普遍的な問題を含んでいるのだ。問題の解決には知識が必要で、ユーザー、建築家、デザイナー、技術者、エコノミスト、環境主義者、政治家等々の人知を集め、さらに適切なデザインを作り出すのに必要な時間を確保しなければならない。経済優先の狭い考え方は、きちんとしたデザインの仕事の妨げになることが多い。

以上のことから、私の考えの要点をまとめると次のようになる。

問題点：公共的建築の開口部（ドア）について

そのものを決定する要素：さまざまな利用者層からの機能的要求

建物の冷暖房の機能的要求

かかるコスト

そして適切な業者

デザイン：次の点を満たしている開口部

だれにでもに使えること

フレキシビリティ

単純さ

わかりやすさ

誤った使用にも対応出来ること

最小限の力で使えること

大きさ、空間的ゆとりがあること

「すべての人のためのデザイン」には、この7項目の原則、あるいはドグマともいうべきことが常に求められる。

ここであげた自動ドアの例は多くの事例のうちのひとつというだけでなく、現代の建物のデザインにおける複雑さよく示している。これまでの社会では扉を開け閉めするドアマンがいて、失業者がひとりでも少なくなるような仕組みになっていた。

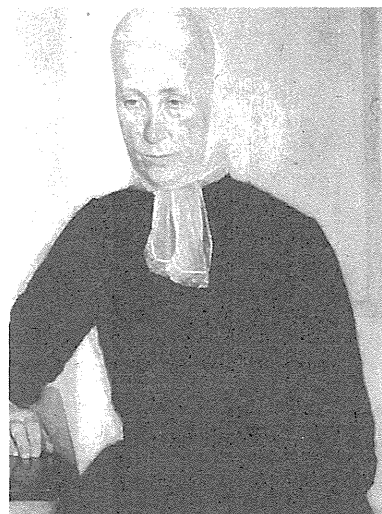
歴史的に見てどのようなことが自由と民主主義の最も優れた形として言い表されるだろうか。「アクセサビリティ」ということが重要な課題となるべきではないだろうか。今年、1900年代の最後の年は国連が定めている「国際高齢者年」である。先進諸国では、年齢分布で65歳以上の人口が3分の2になる。

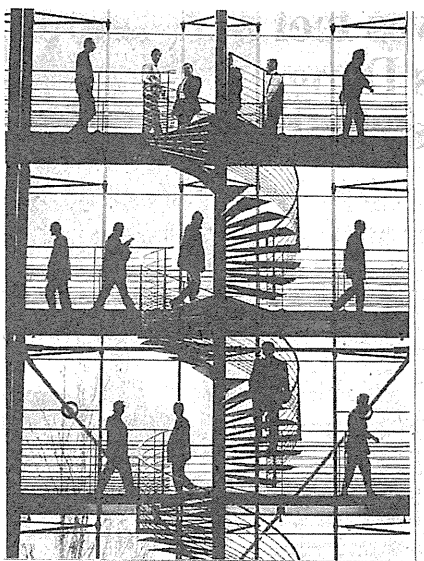
われわれすべての人間は、みな子供のときがあり、女性はおなかに子供がいるときもある。病気や事故、そして老化などで結局人生の10分の1の間は不自由に過ごすことになる。今世紀、われわれの住む都市を発展させてきた方法は、まず主にスピードと機動性、つまり距離を縮めることであった。したがって、都市は水平方向の移動手段として何層もの道路を作り、巨大な住宅団地、業務地区、文化施設のおかれる区域は別々に分断されてしまった。

これは老人たちにとってのアクセサビリティや動き易さには理想的かたちとはいえない。実際、広い意味でのデザインであるわれわれの身のまわりの環境は、敢えていえばこれまで男性で右利きの技術的なことのわかる20歳から40歳の人間に合わせてのデザインであった。65歳以上が人口の3分の2を超えるという統計をもとに、すでに産業、商業の世界は消費者として大きな可能性をもったこの将来の老人たちに標的を合わせている。

責任あるデザイナーとして、われわれは、高齢者を消費者として見るの

ではなく、ユーザーとして見るべきであり、われわれの責任は複雑化したことを解きほぐし、ユーザーの求める理にかなった要求にこたえることである。それは新しい製品のデザインのなかで考えることだけでなく、よりよい生活





や、歳をとっても不便ではない環境を計画あるいは再計画することに真剣に取り組むことである。

85歳の老女と回転扉の話に戻るが、実は彼女は買い物のためにショッピングモールに出掛けた訳ではなく、血液検査のために医者に行く途中だった。医者もショッピングモールのなかに移ってしまって、車でしか行けないようになっている。彼女は車の運転をやめていたので、通院には誰かの助けが必要である。

彼女が住んでいる場所は40年前は200メートルもゆけば医者がいるところで、日用品店、牛乳屋なども街角にあった。医者は老人、病人を往診し、商店主が商品の配達をしてくれた。

彼女は不平をこぼさず、いい生活をしていると考えている。だが、ときどき世界があまりにも複雑化してしまっていると感じ、未来を憂えている。

この老女とは、実は私の母のことである。

国際委員会関西事業支部での活動

関西国際委員長 ベリー史子

関西事業支部では、私達から情報発信をしたいという積極的な思いを持ちつつも現実には難しく実現しなかったが、海外の人が大阪に来られるチャンスを使って講演会を開催し、外国のデザイナーと話し合う場を持つことができた。ここでは私の個人的体験も含めて、これらから得たことについて書こうと思う。

この7月には、IFI理事長マリアヌ・フランセンさんと夫君のハンス・ハーゲセン氏が大阪に来られる機会があり、中川きぬこ国際担当理事の助けを借りて夫妻の講演会を企画し、JIDメンバーとは顔を合わせて話ができるような茶話会・懇親会を設けた。

中川さんよりお二人の人は聞いていたが、声を聞く

のも初めての私は少しドキドキしながら、まず大阪に到着した二人の宿泊先ホテルに電話した。話を始めてすぐに私の心配はすべて杞憂であることがわかった。英語は分かりやすかったし、気さくな優しい雰囲気伝わってきたから。大阪には数日間滞在のご夫妻であったが、フランセンさんはコンペティションの審査員として昼間は拘束されていたため、私は一日、ハーゲセン氏を、氏の希望により兵庫県宝塚市にある「<ゼンカイ>ハウス」(1998年JID賞・インテリアスペース部門賞を受賞)に案内した。地下鉄、大阪環状線、阪急電鉄を乗り継いでの旅。阪急電車に乗って、宝塚に近づくにつれて風景が大阪とは変わってくる。設計者の宮本さんに今は事務所として使っているこの空間を快く見せていただき、老朽木造長屋をどのように鉄骨を用いて補強し、自分の家に込められていた思いを様々なところにいかに残して改修したかを自分の目で確かめられたことを、彼はとても喜んでいて。

大阪に戻ってきて喫茶店で一休みし、氏はマリアヌさんとの夕方の約束時間に間に合うようにとホテルに向かった。初めてお会いするハーゲセン氏とは、往復の電車の中やお茶の時間に、お互いに日常生活や海外の生活のこと(氏は中東やアフリカ等に滞在経験有)仕事のことなどを雑談した。丸いめがねから優しい目がのぞくハーゲセン氏は、建築の計画・デザインには自分の信念もっていて、後で氏の携わった空港のスライドを見た時には、空間の持つ暖かさやおもしろさの表現に、なるほどと思った。

その翌日には、審査からやっと解放され時間のとれたフランセンさんとハーゲセン氏を囲んで、ホテルリッツカールトンのラウンジで佐々木恵子支部長、支部委員の八十さん、村上さん、石原さんと私とで茶話会をもった。フランセンさんが審査員を勤めたコンペティションの最終選考の対象作品に関して「編む」というテーマの解釈がどれも深くほりさげられていて、審査がおもしろかったことを聞き、次に、JID関西事業支部の状況を説明してメンバーの職種について話し合った。インテリアデザイナーと建築家との違いにも話がおよび、IFIはインテリアデザイナーの団体であり、マリアヌ自身もそうであることを強調、夫君のハーゲセン氏は建築家で、デンマークではその仕事は重複するところもあるが、職種としては、はっきり区別されるとのこと。職種の話は特に、日本と同じようでもあり事情が違うようでもあって興味があり、もっといろいろと話したかったが、講演会が後に控えていて時間が足りず、とても残念だった。

大阪府建築士会と共催での講演会では、ハーゲセン氏は空港の計画・デザインについて、フランセンさんは北欧のインテリアデザインについての興味深い話をされた。(詳しくは関東における講演会報告を参照)私自身には特に、フランセンさんの3枚のスライドーデンマークの静かな水辺風景、モノトーンの葦の向こうの沖に見

えるフィッシュネットの棒にカメラレンズが近づいていく姿は、その奥に深い意味をもって迫ってきて、同時に「デンマークは自然の資源に乏しい国なので、その中で居心地のよい空間を作ろうとしている」という趣旨の話は、インテリアデザインとは何かという根本とついていようと考えさせられた。後の懇親会でもこの言葉は話題にあがっていた。

この講演会に先立ち7月初めには、デンマークの家具デザイナーでもありデンマーク・デザイン・スコーレの教授でもあるロアルド・スティーン・ハンセン氏を迎えて、デンマークの家具デザイン史と氏の家具デザインに関する講演会を行った。家具デザイナーと製作側との製作費用に関する話もあり、多数参加していた学生の会メンバーからは懇親会でも様々な質問があり、熱心に答えるエネルギーなスティーン氏やJID会員の姿が見られ、有意義なひとときであった。

何も無ければ会わなかったであろう海外の方々と身近に会い、話ができたことはすばらしい経験であった。

* International Federation of Interior Architects/ interior designers



フランセンさんとの茶話会、八十さん、佐々木さん、石原さんと

第19回IFI総会報告

開催：1999年9月30日～10月1日

日 於：シドニー市／オーストラリア

JID代表 中川 帛子

名古屋でIFI総会が開かれて以降の総会開催地は世界を廻りはじめました。今回の総会は南半球地域で初めて開催、2001年の次回は南アフリカに、2003年はインドに決定、ついでながら、2005年にはブラジルと韓国が名乗りをあげており、当分総会はヨーロッパ、アメリカを素通りする気配です。ヨーロッパで30年前に誕生したIFIが他の大陸にも広く認識され始めた兆しとも思えます。またIFI事務局がアムステルダムから南ア



リカのヨハネスバークに移って最初の総会でもありました。出席国は17か国、オーストラリア、オーストリア、ブラジル、中国（香港）、デンマーク、インド、アイルランド、日本、韓国、マレーシア、ノルウェー、フィリピン、南アフリカ、スウェーデン、台湾、英国、ハンガリー（新加盟国）、委任状は10団体あり、総会は成立しました。

●総会第1日

議事に先立ち、異例のスケジュールとして、韓国の哲学博士で医師でもあるDohOl氏の“*Soil, Health, Design*”と題する講演が英語で行われた。東洋思想の木、火、土、金、水の五行を軸とする“氣”の思想を用いて芸術とデザインと人間の技を解き明かそうとする講演でした。

◆議 事

(1)理事会報告、会計報告、事業報告が各担当理事によりなされ、承認された。

事業報告のあとIFI事業の一部であるPRO VITAE(for life)事業に参加した個人、団体が理事長より参加証を授与された。この中にはJIDのDESIGN AID 99が、南アフリカのSMALL BEGINNING団体にバザーの収益金を贈った事への謝辞と参加の証明としてJIDのDESIGN AID委員会も表彰された。白石委員長が参加の予定であったが体調がすぐれず直前で不参加となり、代表の中川帛子が代わりに受理した。

その他、韓国KOSID主催の学生の為のワークショップ“WING”、ノルウェー協会主催の学生の為のワークショップ“WOOD”、デンマーク協会主催の“障害者と共同作業”、スウェーデンの学生個人の“避難民の為の組み立て式テント”の研究等に参加証が渡された。

(2)1999-2000年任期の理事の立候補者による立候補所信の発表、立候補者名：

- ・新理事長候補：Des Laubsher（南アフリカ）
- ・次期理事長候補：Olle Anderson（スウェーデン）
- ・再選理事候補：Marianne Frandsen（前理事長）、YoungBaek Min（韓国）、K Thornton（オーストラリア）、Calorina Szabo（ブラジル）
- ・新理事候補：Pierr Lo（中国／香港）

(3)新加盟団体承認：下記4団体とも満場一致で入会が承認された。

- ・正会員：①ハンガリー Association of Hungarian Artist (MAOE)
- ・賛助会員（デザイン団体）：ケニア
 - ②Society of Keniya (DESK)
 - 同（教育機関）：南アフリカ
 - ③Echnikon Witwatersrand (TWR)
 - 同（教育機関）：南アフリカ
 - ④University of Pretoria (TUKS)

(4)会員年会費の承認：1999-2001年

現状で据え置きと決定。IFI事務局の南アフリカ移転に伴い、事務局維持管理費の節減効果が期待できるので

今年度の会費の値上げは無くなった。

(5)2001年IFI総会及び国際会議の開催予定国、南アフリカの主催者代表がビデオによる開催計画を発表した。当初予定されていた開催地ダーバン市が変更になり、替わりにヨハネスブルグ市での開催が報告された。

(6)2003年総会誘致候補に立候補中のインドがビデオによる紹介を行った。引き続き投票が行われ、全員一致でインドの開催を承認した。

(7)2005年総会開催候補としてブラジルと韓国がビデオによる開催誘致のプレゼンテーションを行った。次回、2001年の総会まで決定をもちこすことが全員一致で決まった。

●総会第2日

開会に先立ち、オーストラリアの写真家R. Woldendorp氏のスライドによるオーストラリアの自然を紹介する講演が行われた。

(8)“DESIGN FOR THE WORLD”の批准：

1991年に提案され、組織作りが完了した新しい国際組織DESIGN FOR THE WORLDの批准がもめられた。批准投票に先立ち理事長から新組織の趣意書定款についての説明があり、続いて採決の結果批准された。

(9)次期理事長承認及び次期理事選出選挙：

第1日目の(2)の項で報告した、候補者すべてがそれぞれの立場で選出され、総会代表全員から拍手をもって迎えられ、前任の総理事が退任し、新理事長以下、全員が壇上にて、任務の交代をした。

(10)雑件報告事項：

・経済的理由で一時退会していたカナダの協会がIFI復帰の意志を通告してきた。

・南アフリカデザイナー協会は、組織再編成を行い、協会名を変更した。

新名称：Design South Africe, DSA (旧SDSA)

・国際デザイン3団体 (IFI, ICCGRADA, ICSID) 共同製作によるICOGRADA/ICSID/IFIジョイント・データベースがインターネット上に開設された。アドレスは、WWW.design-db.unet.ocn.ne.jp
各団体のメンバーに関する情報、及び国際コンペやデザイン関連イベント情報を載せている。会員からの情報提供は各団体事務局へ。

(11)新理事長Des Laubscher氏の挨拶があり、全ての議事が終了した。

3団体合同国際会議 SYDNEY DESIGN'99 報告

開催：1999/9 26～29 於：シドニー市

都合で、会期第3日目の午後からの参加になり、開会式や基調講演には参加出来ませんでしたが、主催者の報告によると、参加者は延べ二千人数とのこと。3団体合同としては少ない参加数です。JIDからの参加者は中川

帛子一人と寂しい限りでしたが、JIDAからは15人ぐらい、JAGDAは確認できませんでした。

シドニー市は来年のオリンピックをひかえ、競技場を含むほとんどの施設が完成しているとのことで、オリンピック施設関連に関わった多数のデザイナーの報告が盛られていて、講演の中にはオリンピックを意識した人選が見られ、スポーツウェアをデザインした服飾デザイナー(USA)や、30年間George Jensenで銀細工デザインをしてきたVivianna T.B.Hubet女史、また、自らがIDデザイナーで義足を使用しているアメリカの若い女性が自分のお洒落の為にデザインしたハイヒールの義足を披露しての講演等がユニークでした。

アジアからの講師は中国、インドのデザイナーで、日本でも若い女性に人気のある香港のALAN CHAN、中国本土からは市場経済への移行のなかで活躍する若手グラフィックデザイナーが中国のグラフィックデザイン事情や作品を紹介していたのが印象に残りました。大変残念だったことは、80余名のゲストスピーカーの中に、一人の日本人も加わっておらず、かろうじて、自主フォーラムにJIDAの大蔵氏の名前があるだけでした。このことは、同時に開催されていた世界産業展覧会に日本の企業が一社も参加していなかった実情とあわせ、オーストラリア国際会議での日本の存在感の薄さには無念の思いを感じました。

国際会議のハイライトはオリンピック屋内競技場で夜間に行われたガラパーティーです。市内から、電車で20分ほどの郊外に建設された円形の競技場は太陽電池利用で照明しているという照明器具に照らされて浮かびあがっていました。昼間聞いた建築家の報告にあった照明です。円形の競技場の床にはテーブルが並び、千人以上の参加者が歓談、友好と交流の輪を広げました。合間に各種のデザイン賞が個人、団体に贈られ会場の拍手が続き、終電車まで名残りを惜しんでいました。

国際会議全体の印象としては、現在オリンピック施設を完成した自信と競技を迎える直前の気分の高揚で、主催者もデザイナー達も、世界を覆っている経済不安や不況には実感が薄いようで、会議のテーマも成長経済を視野に入れた希望的なものが多く、我々が昨今抱えてる先行きの見えない重苦しさは伺えませんでした。

今回は南アフリカでのIFI単独の国際会議の予定です。世紀が代わる2001年にはJIDも元気を回復して大勢で参加したいものです。



新理事の顔ぶれを事務局長が紹介

1999～2000「JID 21世紀に向けて」

関東事業支部 支部長 山下 博之

会員の皆様には、関東事業支部活動にご理解ご支援を頂き有難うございます。関東事業支部は、会員・賛助会員・他団体・学生・一般への開かれた支部及び支部活動を協会内外へ情報発信をし、協会の社会性を高めることを目的に事業を行ってきました。

1999年は、

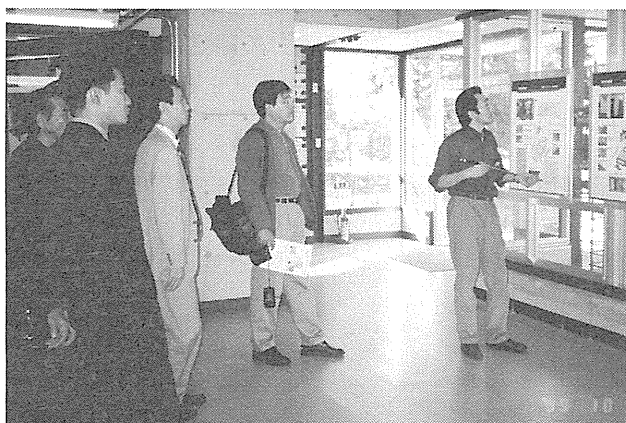
●7/14 第8回「デザイン職人四方山話」話し手：新居 猛さん（JID）コーディネーター島崎 信さん（JID）INAX銀座アーキブラザセミナー75名の学生・会員・賛助会員の参加者。

●10/8 第9回「デザイン職人四方山話」話し手：渡辺 カさん（JID）コーディネーター垂水健三さん（JID）ICSカレッジオブアーツ57名の学生・一般の参加者。

●10/28 住宅・都市整備公団「建築技術試験場見学会」八王子19名の会員・賛助会員の参加者。

●7/1～7 インテリアデザイン展「住まいのオールヌーボーの時代」タジマショールーム130人以上の一般・学生・会員の見学者。同時開催7/1オープニングセミナー芸術運動と女性たち「アート&クラフトからオールヌーボーへ」講師：糊沢成明（アトリエドム代表・建築家）タジマショールーム58名の学生・会員・賛助会員の参加者。7/6 インテリア基礎講座「インテリアエレメント概論」講師：佐藤健一さん（JID関東支部研究委員会副委員長・長岡造形大学講師）タジマショールーム42名の学生・会員・賛助会員の参加者。

●7/19 （社）日本インテリアデザイナー協会関東



建築技術試験場見学会

事業支部／北欧建築デザイン協会共同企画講演会「北欧の建築とデンマークデザイン」講師：HANS HAAGENSEN氏 MARIANNE FRANDSEN氏 工学院大学88名の会員・一般・学生の参加者。7/17～8/8 40周年事業企画展「日本の生活デザイン展」への企画運営協力。

●4/24・25 デザイナーAIDへの協力。

●9/15～19 JIDリビングデザインシリーズ展「内側からの提案」への協力。など、活発に活動し他団体賛助会員・学生・一般への働きかけが功を奏し会員外参加者が多くなって協会の認知度、社会性が高まっています。

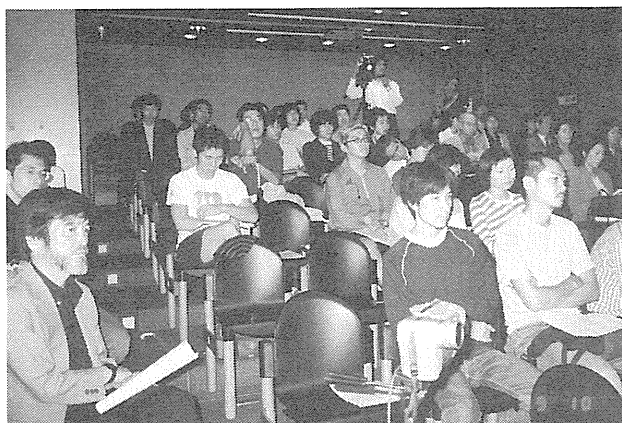
2000年には、

恒例の「デザイン四方山話」第10/11回の実施。（交流委員会）「デザイン四方山話」のビデオライブラリー制作・第1～10回を本に仕立てて出版社に持ち込む。（出版委員会）インテリアデザインの次代を担う若者の育成と支援、延ては協会の若返りと活性化を目的としたシステム化された学生、若いデザイナーの「JID関東ユース」を5月発足し（組織委員会）、現委員会組織をシンプル化し幅広い情報の共有化が図れ、目的に即しアクティブで流動的な組織・支部会員が参加しやすい組織を構築します。それに伴う支部内規の見直し（総務委員会）、またインターネットホームページによる国際交流、よりの確な社会への情報発信・支部活動の対外広報活動（広報委員会）等など多岐に活動しますが、これは全て開かれた関東支部、活動しやすい組織、より社会性を高める為の改革です。

関東会員の皆様に再度お願いいたします。協会の為に是非委員会活動にご参加下さい。（尚、2000年の事業は新組織で運営されます。上記委員会は名称が変わります。）



渡辺 カさん



デザイン職人四方山話

1999年を振り返って、2000年に向けて

関東事業支部担当理事 阪井 良種

前回の選挙で初めて理事に推され、関東の担当理事として、早もう2年の任期を終わろうとしております。本年度は協会設立40周年にあたり、関東としても各種事業に協力・参加と、会員の皆様には何かと忙しい年であったことと思います。支部事業も、支部長はじめ大半の委員長が任期2年目に入り、内容の有る充実した活動が行われたと考えております、何にもまして委員の方々の献身的な努力が実った結果だと感謝いたします。

次年度は、2000年の大きな節目の年として、関東支部ではよりオープンで流動的な委員会を目指し支部組織変革と、次世代の協会を見据えた組織強化の新企画事業を計画中です。

JIDは会員皆様の組織です。協会に求められるすべての“コト”は、皆様の努力で作りに上げられるはずです。是非何らかの委員会に入り、内側から21世紀の協会と一緒に作り上げて見ませんか。

「椅子展」東から西へ

関西事業支部 石原 薫

10月、大阪で開かれた「椅子'99」の展覧会は、前年の11月、東京で開かれた「椅子100人100脚100m」を関西でも、と開催したものです。関東、中部、九州の方々が多数参加していただいて、本当に良かったと思います。40周年のテーマ「つなぐ」の意味を深く感じました。ところで、関西以外の方は見にいけないし、関係者（例えば私が）すごく好評でしたと言っても（そう言わない関係者なんていませんし）、この問題を少しでも埋めようと今回、観客と出品者をつなぐアンケートをしましたので、一部紹介します。

（各節、頭に書いてるのは椅子の名前です）

- ☐車椅子—人気があって座れなかった。
- ☐高齢者の椅子—座ると背がのびてよい、10万円で買う。
- ☐ツイスト—素晴らしい、商品化したら教えて。
- 他にも何々の椅子が欲しい、が沢山ありました
- ☐低座椅子—楽ちん、フワフワのソファ—と異なって落ち着く、一緒に住んでいる83才の祖母に座らせたい。
- ☐はっぱチェア—実物を見て座ってひっくり返してみたいセミナー聞き逃して残念です。
- ☐紙のスツール—座ると大丈夫で驚いた。
- ☐会場にJIDの人がいた、しゃべりたかった（学生）。

☐ほとんど座っていたら、ほわほわして良かった（8才）。

☐「座れなくて何が椅子か」や「あの椅子に座ってみたかった」など「座らないで」の表示に怒りの声が多くありました。「これは私のデザインだが、お客様から借りてきた椅子なので」（樋口 治様）のように事情がある場合もあるのでキッチリ説明表示するべきでした。

ほとんどのアンケートが住所、氏名を書かれていました。当該の出品者にアンケートをお渡ししました。

いつか又、会員が参加できてできれば企画段階から各支部が参画出来る、展覧会を強く願います。

「デザイナーって？」

賛助会員（株）ローム 松浦 正和

JIDの賛助会員になっているということ、最近わかった不届きな私です。勤務先の会社から1名というルールになっていたのか、何しろ前任者から退社時に言い残した言葉が「今度、君をJIDの会員にしておいたから……」。JIDが何もの（？）かも知れず去った上司も上司なら、今回JIDニュースの原稿を一方向的に依頼してきた先輩も先輩だと、いつの間にか入信させられた〇〇信者のような思いを抱きつつ原稿を書いているのです。現在私は、インテリアテキスタイルの企画問屋に勤めていますが、当初グラフィックデザイナー募集ということで入社しました。ただ、グラフィックデザイナーという言葉に多少疑問をいだいているのです。特にデザイナーという言葉が引っ掛かり、JIDも日本インテリアデザイナー協会の略だと知り、尚更こだわりが増すのです。デザイナーと似たもの同士のクリエイターやアーティストという言葉があるようですが、昨今、何がドウ違うのかトミに解らなくなってきました。「別に区別する必要もないんじゃない」という方も多いでしょうし、「区別したから何なの」という質問もなされるかと思いますが、私はどうしても拘ってしまうのです。先日、デザイナーという肩書きの方におもわず「何をなさっているのですか？」という愚問？を投げかけ、カクカクシカジカと説明をいただきましたが、さらに「で、デザイナーってどういう人をいうんでしょうね？」と聞くと、「えっ、私ってデザイナーじゃありませんか？」と返されたしだいでは実は本人もあまりわかっていないような……。こんな事がよくあるので、尚更デザイナーって何？と拘ってしまうわけです。デザイナーの語源や、語学的意味などの解釈を求めているのではなく、私はデザイナーですという自意識レベルでの身勝手な解釈の乱用と、いかにもポジショニングを確立させている社会的共通理解のレベルの低さが……かいまみられて悲しいやら寂しいやらの日々です。

コクヨが提案する
Competitive Workplace ～勝つためのオフィス～

コクヨ株式会社 清家淳一 柏原 敏雄

厳しい経営環境の中で、企業の合併・吸収、事業の再編成や業態変革、キャッシュフロー改善など企業は生き残りをかけ様々な施策を講じている。その施策の一つとしてオフィス変革があり、多くの企業が効果をあげている。

オフィスは経営を行なう現場である。ワーカーが情報を生成・発信し、事業を遂行していく場であるため経営資源の一つとして捉えられる。又、オフィスは物理的なスペースが必要となるので、経費の一要素となり大きなウェイトを占めている。施策の一つとしてオフィスが捉えられているのもこのことから十分に納得できるところである。

企業が競合会社に打ち勝つためにオフィスを変革し、言い換えると「勝つためのオフィス」を構築することが重要であるとコクヨは考え、『Competitive Workplace ～勝つためのオフィス～』をテーマとしたモデルオフィスを1999年8月に構築した。

勝つためのオフィスを構築するには何をどうすべきかを検討した結果、3つの方向性を掲げた。①コラボレーションの促進、②スピードアップ、③ローコストオペレーションの3つである。



コラボレーションの促進という点では、まず、4個所に分散していたオフィスを1ヶ所に統合することにより、25%もの面積が削減した。さらに、1ヶ所に統合しただけではコラボレーションが図れないと考え、ノンテリトリアルオフィスを導入した。ノンテリトリアルオフィスとは固定席を持たず、業務に応じて最適な場所を選択して行なうワークスタイルである。これによりワーカーの交流・協業が行ないやすくなり、コラボレーションが促進されることで価値の高い提案や対応ができると考えた。

スピードアップの点では、迅速な情報交流を行なうために、グループウェアや構内PHSとボイスメールなどの情報技術を活用している。

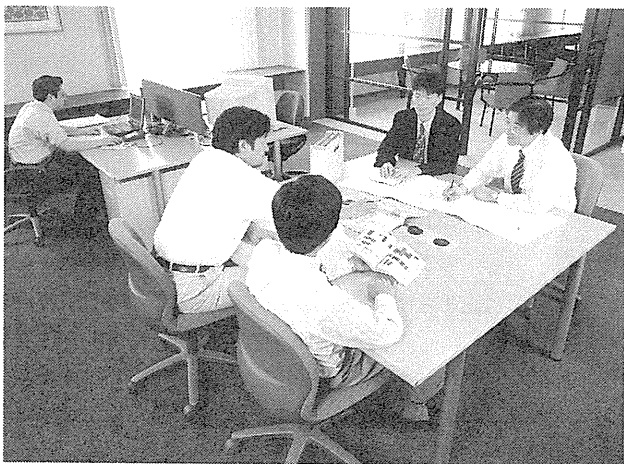
ローコストオペレーションについては、オフィスの運営維持コストを削減するために、ユニバーサルプランを導入した。これは組織変更や人事異動があった際に、従来は家具や電話・LAN等の変更工事を行なっていたが、家具・什器のモジュールを統一し、人事異動があった場合、人の移動だけで済むことや、インフォラーナーとい



う弊社の情報配線システムにより電話やLANの変更工事を不要とすることで大幅なコストダウンを実現している。(一人当りの異動コストを12万円から2万円に削減)

一方、執行役員制度の導入により、常務以上の役員8名を一個所に集中し、経営会議、討議を頻繁に行ない、迅速な経営上の意思決定ができるように役員フロアの改造もあわせてこの時期に行なった。

11月16日 15:30分～見学会 17:30分～親睦会
コクヨ迎賓館にて賛助会員とゲストを迎えJID会員との楽しい会話が続き予定より約1時間もオーバーしておりました。オフィスに対するデザイン範囲が少しでもおおくの人たちに理解していただければ幸いです。



「椅子'99展」 オープニングセミナー&パーティ報告

関西事業支部研究委員長 安藤 真吾

10月9日から開催された40周年記念事業「椅子'99展」の開催日当日に、「椅子'99展」会場に近いアジア太平洋トレードセンター(ATC)ITM棟10階の大阪デザイン振興プラザ交流サロンにてオープニングセミナーとオープニングパーティを行ないました。

オープニングセミナーは「椅子を語る」というテーマで、長大作氏と喜多俊之氏にパネラーをお願いし、関西事業支部賛助会委員長の清家淳一氏のコーディネートで始まりました。

長大作氏からは、低座椅子へ

のこだわりや建築家としての椅子への想い、そして現在の活動など、氏の穏やかな中にもきらりと光る独特の語り口でお話いただき、聴衆も大変興味深く聞き入っておられました。

そして、喜多俊之氏には、ビデオによるイタリアでの家具の製作風景や最近出版された本の紹介など、これまた氏の軽妙で楽しい魅力的な語り口でお話いただきました。

最後に、参加していたインテリアデザイナーを目指す若い学生さんたち(当日は、関西事業支部学生の会の会員学生が多く参加していました)に長大作、喜多俊之両氏から興味深い助言をしていただき、あっという間に1時間30分が過ぎました。

お二人には御多忙なか、本セミナーのパネラーを快くお引受け頂き本当にありがとうございました。紙面をお借りして御礼申し上げます。

セミナーは、関西事業支部だけでなく泉理事長をはじめ関東や中部の椅子展の出展者の会員の方々も加わり、予定の倍以上の81名という参加者となり、主催者側もパーティの飲みものや軽食の追加などで奔走しました。

セミナー終了後は、椅子を移動してそのまま会場はパーティ会場へと早変わり。セミナーの余韻を楽しみながらの椅子談義に花が咲いたり、会員同士の旧交を温められたりと皆さん非常に楽しいひとときを共有されたと思います。

関西事業支部でこれ程の規模のセミナー&パーティが行われたことは最近なかったものでしたから主催者一同感激しております。

最後に、あまりにも当日参加者が多かったもので、遠方より来ていただいた皆様には、進行等に不手際がありましたことをおわびいたします。



中山博文さんを悼む

関東事業支部 福田 友美

11月5日通夜、との訃報を受けた時、すぐには信じられなかった。数日前電話で話した時はいつもの中山さんだったからだ。あまりにも突然の死。〈ぜんそく〉とのことだった。

中山さんとおつき合いは'76年、彼がQデザインズを辞し、リネアジャパンに入社時以来になる。「もっと実践的な場で仕事をしたい」と言うのが、リネアに移った理由だったと聞いた。

リネアでは営業企画として、マーケティング、商品開発にかかわるデザインプロデュースなどを担当した。分析力にすぐれた意欲的な人で、とても情報通だった。

今日につながるリストラのはしりのころの'93年リネアを退社。当時、独立も考えたようだったが、時の状況を見て断念、マノレジア社に入る。

そして'98年、第二の転機がくる。今度は思いきって、50才の独立だった。あらたにモデリングの技術を修得、武器の一つに加えるなど多少の準備もできた。横浜の青葉台に持った事務所も今年（99年）の3月、マンションの完成を待って十日市場に移した。また一方で、デザイン学校の教鞭の仕事も始まっていた。

さあ、これから……と言う矢先のことだった。

JIDとのかかわりでは、事業委員会のプロジェクト「'99国際家具見本市・特別イベント」に、委員として参加していたし、長谷川隆之会員とのプロジェクトも進行中であつたと聞く。

そんな途上で逝ってしまった。享年52才。なんとも悲しい。ご冥福を心からお祈り申し上げます。 合掌。



体に走った。

生者必滅、会者定離、とはいえ、人の生命のはかなさが身に響き、思い出が浮いては消えた。お二人共、白木屋（東急百貨店日本橋店に変わった）におられたが、かねいちのマークは如何にも日本橋の老舗らしく粋なものがあつた。その中でインテリア部門を通じて大きな活躍をされていたが、東急百貨店と合併という歴史がつくれ、更に閉店という淋しい結果になった。正に現代の世情に涙したいものであつた。

しかし、湯山さんは、その人柄とビリッとくるセンスで皆に慕われ、そのキャリアをもって小田急ハルク創設から発展を指導されたのだ。それは地下街を含む副都心計画にもつながっていた。

高須さんは白木屋、東急百貨店合併後もインテリア部門で活躍され、その範囲は住宅をはじめ店舗、ホテル、レストラン、各企業と病院、学校そして船舶インテリアでも腕を発揮され退社後はアトリエ“英”をつくられて現在迄デザインワークを続けておられた。

ともあれ、お二人共、御年齢から察するに、戦前中後なかでの体験も多く、特に戦後の混沌とした社会でのデザイン活動は大変なことだったろうと察せられる。自己のポリシー、企業のデザインに対する考え方等々、その苦悩は続いたことであろう。

しかし、今になっては残念乍らお二人の話は聞けない。時の流れは常に止まらず、人の生命と想いも揺れ動き続けている。

八方に走きて 道を求むれば
渺渺として多蹊に困ず
帰り来って虚室に坐すれば
夕陽吾が西にあり

宋の詩人、黄山谷の詩であるが、今更の様に脳裡をかすめる。

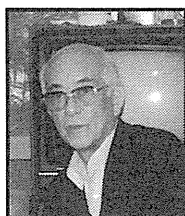
湯山さん、高須さんもう御話も伺えませんか。どうか安らかに旅立って下さい。心から御冥福を祈って止みません。 合掌。

湯山武太郎さん・高須英彦さんを悼む

関東事業支部 西澤 圭三

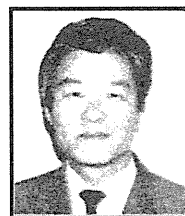
日毎に深まりゆく、秋のうつろいの中、庭木のシルバーメイプルが紅葉し、風に揺られて一枚一枚とその姿を変えている、窓辺からつい

想いをとられていると、事務局から電話が入り、湯山武太郎さんが11月6日、享年87才、高須英彦さんが10月1日、享年76才、という訃報であつた。お二人共、日本室内設計協会時代からの先輩であつた。理屈では割り切れないものが身



●訂正とお詫び

JID NEWS 208号「山田伊三郎さんを悼む」の中で、故・池部陽さんとありますが池辺陽の誤りでした。又、山田伊三郎さんの遺影が欠落いたしました。お詫びして訂正させていただきますと共に、あらためてご遺影を掲載させていただきます。



事務局の年末年始の休業について

12月29日（水）より1月4日（火）まで休業いたしますのでよろしくお願い申し上げます。

1999/11~12

社団法人 日本インテリアデザイナー協会月報（1999年通巻209号）

1999年12月25日発行

発行所／社団法人 日本インテリアデザイナー協会

発行人／泉 修二

〒163-1008 東京都新宿区西新宿3-7-1 新宿パークタワー8F

TEL 03-5322-6560 FAX 03-5322-6559

企画・編集／JID本部・事務局 制作／be-one